

1966年の日比谷高校生・吉田城と新井啓右の思い出

内 田 樹 Tatsuru UCHIDA

吉田城君は1966年に僕が東京都立日比谷高校に入学したときの同期生である。

でも、僕が吉田君とはじめてことばをかわしたのは高校においてではなく、1969年の3月、入学試験の数日前の京都大学構内でのことである。

その年、東大の入試が中止になり、日比谷高校生たちの半数ほどが京都大学に受験にやってきた。僕はその前年に品行不良で退学処分を受けたのだけれど、秋に大学入学資格検定に合格して、なんとか同期生たちと同時に受験するのに間に合った。僕は単身で京都に行ったが、日比谷の諸君は何人かずつ連れてやってきた。その中に新井啓右君がいた。

新井君が同期で最高の知性であることは衆目の一致するところだった。いずれ新井君が同時代日本人の中でも最高の知性であることを学術の世界か政治の世界で証明するだろうと同期生はほとんど確信していた（惜しいことに、彼は東大法学部の助手のとき二十七歳で急逝した）。

僕はなぜか新井君と仲が良かったので、受験会場の下見にゆくときに新井君のグループに加えてもらった。それが吉田城君と個人的にことばをかわした最初である。

そのときに彼とどんな話をしたのか、何も覚えていない。なにしろ四十年前のことだし、僕たちが京大構内に足を踏み入れるなり、火炎瓶が飛んできて、話にも何もならなかったからだ。粉雪の舞う曇り空にオレンジ色の焰の尾を引いて火炎瓶が放物線を描いて飛んでゆく時計台前の風景はなんだかやたらにシチュールで、大学受験というような切実な話とぜんぜん無縁のもののように思えた。

「受験はほんとにあるのだろうか？」と僕たちは近くの喫茶店で話し込んだような覚えがある。いつものように新井君が怜悧で落ち着いた声で「いや、やるでしょう。そりゃ」と断定してくれて、一同はほっとした様子だったが、僕は内心「試験なんかなくなればいいのに」と思っていた。高校二年で学年最下位にまで成績が下がり、その後も十六科目も受験科目のある大検のせいで、受験準備が大幅に遅れていた僕は「だめもと」の京大受験だったからである。

そのときにどんな話をしたのかはひとつも覚えていないけれど、吉田君と僕はたぶんふたりとも「新井君の友だち」ということでお互いにそれなりの親し

みと敬意を感じたはずである。ほくたちの同期の間では「新井君の友だち」であるということはかなり限定された生徒にしか許されない、ある種の知的プレステージだったからである。

同期の高校生のあいだに敬意とか威信とかいうものが存在して、それに基づいてデリケートな人間関係が構築されているというのは、わかりにくいことも知れない。吉田君のことを話すために、僕たちが通っていた日比谷高校と新井君のことについて少し話しておきたい。

その頃の日比谷高校がどのような教育理念やプログラムで運営されていたのか、受験実績がどうであったのかというようなことは調べれば誰にでもわかるけれど、そのとき、その場所を覆っていた「空気」を想像的に追体験することはむずかしい。

吉田君と僕はその同じ「空気」を15歳から18歳までの間、肺深くまで吸い込んだ（僕は退学になった後もちよくちよく高校に「遊びに」通っていた）。その「空気」を吸い込んだ人々は（本人の意志にかかわらず）ある種の微弱な人格特性のようなものを共有することになる。吉田君と僕も、それを共有していた。

日比谷高校が僕たちの身体にしみつかせた残留臭気はごく微弱なものにすぎないから、部外者に嗅ぎ分けることはむずかしい。でも、それを吸って育った人間同士にはすぐわかる。それは、「シティボーイの都会性」と「強烈なエリート意識」と「小市民的なエビキュリズム」に「文学的ミスチフィケーション」をまぶしたようなものだ（書いているだけでうんざりしてくるけれど）。

日比谷ではまじめに受験勉強をすることが禁忌だった。定期試験の前に級友からの麻雀の誘いを断って「今日は早く帰るよ」と言うためには捨て身の勇氣が必要だった。「勉強したせいで成績がいい生徒」は日比谷高校的美意識からすると「並の生徒」にすぎなかったからである。努力のせいで得たポジションで同級生からのリスペクトを得ることはできない。試験直前まで体育会系のクラブで夜遅くまで汗を流したり、文化祭の準備で徹夜したり、麻雀やビリヤードに自堕落に明け暮れたり、フランス語で詩を読んだりして、それでも抜群の成績であるような生徒だけが「日比谷らしい」生徒と見なされたのである。

い、や、み、な、学、校、で、あ、る。

みなさんだって、そう思われるだろう。

しかし、「い、や、み、な、学、校」だと思われるということ自体「シティボーイである日比谷高校生」にとっては受け容れがたい屈辱だったから、当然のように生

徒たちは「嫌われずにすむ」方法にも習熟していた。それは「『ミスティフィケーションしていないふりをする』というミスティフィケーション」である。

「僕らは何にも深いことなんか考えちゃいませんよ。ただ、何となく空気に合わせて気楽にやってるだけなんです。成績なんて気にしたことないですよ」と、さわやかな笑顔で、控えめに、かつものすごく感じよくアピールすることができるのが「真の日比谷高校生」の条件だった。

でも、450人いる同期の中で、そんなふうスマートにふるまうことのできた生徒はほんの一握りだった。吉田君は、新井君や塩谷安男君（弁護士）や小口勝司君（昭和大学理事長）とともに、僕がそのリストに名前を残すことのできる数少ない日比谷高校生の一人である。

そんなリストに名前が載ったからといって、別によいことがあるわけでもないし、悪いことがあるわけでもない。僕がそのリストに名前を載せた生徒たちのことを気にかけるのは、そういう種類の「空気」や「場の大気圧」のようなものに触れたときに、それに「気づかない」でもないし、「あえて逆らう」でもないし、肩の力を軽く抜いて「構えない」というオプションを採用することができた少年たちのスマートネスを僕が愛していたからである。

僕は日比谷高校に入って、そこで生まれてはじめて「スマートな少年たち」というものを見た。「スマートさ」というのは概念ではないし、網羅的なガイドラインがあるものでもない。それは身近に「スマートな大人」を見て育った子どもたちが自然に身につけたものであって、本人の努力でどうこうなるものではない。

僕が彼らのスマートネスを愛したのは、僕にはそんなものが備わっていなかったからだ。僕自身は「さわやかな笑顔」とも謙虚さともミスティフィケーションとも無縁の、向上心むき出しの「どちらかといえば感じの悪い」ロウワームアイドル階層の子どもだった。僕は「日比谷高校の空気」に牙を剥いて、結局そこから放逐されてしまったけれど、このドロップアウトの最大の理由は、僕が「このままでは、あいつらには勝てない」ということに苛立っていたからだ。

死ぬほど勉強すれば彼らのレベルにまで成績を上げることがあるいはできたかもしれないが（いや、やっぱり無理だな）、その際にシティ派的享楽も楽しみ、それでいて査定的なまなざしで少年たちを選別しようとする大人たちの前でさわやかに微笑んでみせるなんていう芸当は、僕にはとてもじゃないけどできそうもなかった。

しかたがなくて、僕は「スマートじゃない人間にしかできないこと」（中卒で働くというオプション）を選んで、自分のプライドを守ろうとした。もちろん

それで「彼ら」に勝てたわけではない。負けはしなかつただけだ。

それでも、僕は自分の中に「日比谷高校的な空気」がずっと残存していることを知っている。あれは一度吸ってしまうと、もう抜けられない種類のものなのだ。第一、僕がドロップアウトしたということ自体が「日比谷高校の空気」を僕が深く吸い込んでしまったことの効果に違いない。あの都会的にソフィステイケートされた韜晦や立ち居振る舞いのさりげなさを身につけるために、どれほどの資源が水面下で投じられているかを知っているのは「やろうとしたけれど、それができなかつた」日比谷高校生だけだからである。

僕は結局69年の京大入試に失敗して、新井君と吉田君は京大に進んだ。新井君は翌年東大を受け直して東京に戻ってきたが、吉田君とはそれきりになった。

次に会ったのは本郷の仏文科だった。一年浪人、一年留年した僕が本郷の仏文科の三年生に進学したときに、吉田君が修士課程に進学してきた。本郷の銀杏並木で遠くから僕をみつけた吉田君はにっこりと微笑んで、「やあ、一足お先に来ました」と挨拶をした。

京都ではどうだったのという僕の質問に、大学がストとロックアウトでずっと授業がなかったからその間フランス語を勉強していたらフランス語がすっかり得意になっちゃって、と答えてくれた（そういうことを言ってもぜんぜんいやみに聞こえない人なのだ、彼は）。僕は大学のストで授業がないときには、どうにかしてもっと授業のない日が続けたいものとヘルメットをかぶってキャンパスを走り回っていたので、僕の駒場のフランス語の成績はオールCで、その年仏文に進学した30人の中で一番できない学生だった。

優等生と劣等生の会話だったけれど、吉田君はそういうときに「内田君も勉強がんばれば」というようなことは絶対に言わない。

「内田君はいつも楽しそうで、いいね」と手を振って去っていった（もちろん、彼はほんとうにそう思っていた）。

次に吉田君の消息を聞いたのは新井啓右君が死んだ後に編まれた追悼文集においてだった。留学先のフランスから吉田君が寄せた追悼文はほとんど「慟哭」というのに近いものだった。

僕はそれを読んで、吉田君もまた新井君という「原器」をつねに意識しながら自分の立ち位置やスタイルを決めていたということを知った。

それぞれが書いた追悼文を読んだ後に、吉田君と僕の間距離は急速に縮まったような気がする。

かけがえのないたいせつな友人が死んだ後に残されたものには責務がある。それは死者が占めていた場所を「誰によっても埋めることのできない空虚」として、精神的な「永久欠番」のように保持しておくことだ。

「もし、新井君がいたら、この仕事をどう評価するだろう?」「もし、新井君だったら、こういう場面でどういう判断を下すだろう?」そういった問いは新井君の死後もしばしば僕を訪れた。おそらく吉田君の場合はそれ以上だったろうと思う。

その「失われた友人の記憶を保存する」という誰にも代替できない仕事は自分には課せられているという責務の感覚が、それから後の僕と吉田君の間の目に見えない結びつきをかたちづくっていたように思う。僕たちには、新井君を記憶する責任、彼がもう存在しないことがどれほどの損失であったかを痛感し続ける責任がある。たぶん二人ともそんなふう考えていたのだろうと思う。一度も吉田君にそのことを確認したことはないけれど、そういうことは言わなくても、わかる人にはわかる。

彼がフランス留学中に患った宿病で苦しみながら、ほとんど「軽々と」国際的な水準の研究業績を上げ、大学での学務をこなし、幸せな家庭生活を営んでいることに誰しもが驚嘆したけれど、僕は「吉田君らしいな」と思ってそれを見ていた。

数年前、飛行場の荷物受け取り場で彼とたまたま隣り合わせたことがあった。「最近どう、元気?」という僕の質問に、彼は「いろいろ頼まれるんだけど、『育児と闘病で忙しいんです』という、たいていの仕事は断れるんだ」と破顔一笑した。自分の病気をジョークにできるすこしブラックなユーモアの感覚は僕にはなじみ深いものだ。

2004年の夏休みに僕は京大の文学部で集中講義をしていた。教室に行くためにエレベーターに乗っていたら、ドアが開いて吉田君が乗ってきた。

「あれ、内田君どうしてここにいるの?」

「集中講義をしてるんだよ」

「道理で、いくら家に電話しても君がつかまらないはずだよ」

彼が僕を探している間、彼の研究室の一階上の部屋で僕は毎日お茶を飲んでいたのである。

彼の頼みは札幌である秋の学会のワークショップで彼の司会するセッションのパネリストとして出てくれないかということだった。

もちろん僕に古い友人の頼みを断れるはずがない。

セッションは吉田君が司会で、京大の多賀茂さんと私がパネラーで、テーマ

は「文学と身体 規範と逸脱」というものだった。多賀さんが「怪物と奇形」の話をして、私が「身体と時間」の話をして、吉田君が「舞踏と文学」の話をした。かなりばらばらな発題だったけれど、司会の吉田君のみごとな手綱さばきで、ちゃんと話は着地した。

このセッションが考えてみると吉田城君との生涯でたった一回の学術的な共同作業だった。

ワークショップの後、キャンパスで吉田夫妻と同行の院生諸君に追いついて、クラーク博士の像の前でツーショットの写真を撮った。これが僕と吉田君が同じフレームに収まっているたった一枚の写真である。

その後、一緒に札幌駅のレストランで食事をした。僕の暴走的トークに吉田君がびしりとクリスプなコメントを挟むという「いつものスタイル」で話が弾んだ。

その日、札幌駅頭で「じゃ、またね」と手を振って別れたのが吉田君と会った最後になった。

大学院時代からの研究仲間や同僚たちに比べると、僕が吉田君と過ごした時間はごく短い。僕よりずっと吉田君の人間性について熟知している友人がたくさんおられるだろう。でも、僕と吉田君が共有していたものは、1966年から69年まで日比谷高校にいた一握りの少年たちにしかわからない種類のものだ。それは人格的にはふたりの共通の友人であった新井啓右君の存在と彼からそれぞれが受けた影響に集約される。僕たちは少年の頃にひとりの得難い友人に出会い、彼の存在の大きさと彼を失ったことの重さをずっと心の中に抱え込んできた。同じものを失った「遺族」の欠落感が吉田君と僕を結びつけてきた。そういうかたちの友情というものもある。

今、また一人の古い友人を僕は失った。彼の死は、彼のことをいつまでも記憶にとどめ、彼の不在を痛みとして感じ続ける人々を後に残すことになる。そのような仕方で、レヴィナス風に言えば、「存在するとは別の仕方で」、死者は僕たちに触れ続けるのだと僕は思う。

(うちだ・たつる 神戸女学院大学教授)